

---

# 東方不幸説

将軍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方不幸説

### 【Nコード】

N9565U

### 【作者名】

將軍

### 【あらすじ】

原作22巻のifから始まる話

処女作なので至らぬ部分あると思いますが、頑張っていくのでよろしく願います。

## 注意書き 初めに必ずお読みください

この小説は、駄文です。

上条さんが、見た眼は上条、中身も上条、性能はチートとなっております。

更には、処女作、駄文、ハーレム、チート、キャラ崩壊など、駄文要素盛りだくさんとなっております。

あと、行き当たりばったりなので、ストーリーが極めて薄いです。

何度も言いますが、駄文です。

以上の項目で一つでも無理、と言う方はブラウザの戻るを選択してください。気分が悪くなりますので。

それでも読む！！ と言う勇氣のある方は、今後も『東方不幸説』をよろしく願います。

第一話 神様（前書き）

超  
a  
a  
a

P S 九月十七日に改定しました。

## 第一話 神様

「勝った」

そこには、天使の姿など何処にも無かった。  
あるのは海水や水圧に耐えきれなくなった『ベツレヘムの星』の残骸だけ。

「俺……死ぬのかな」

「いやいや罪を償わないと」

「!?!」

いきなり上条の前に男が現れた。

上条は、目の前の男を警戒しつつ尋ねた。

「誰だ」

「神様」

「ハア？」

上条は呆けてしまった。

神様は気にせず話を進めていった。

「此処に居たら死んじゃうから、俺の部屋行って話そうか」

自称神様がそう言うと、上条の周りの景色はガラリと変わっていた。  
その場所は何もなかった壁も、家具も、家電も、床さえも。

「これぐらいじゃもう驚かないか」

「何処だ。此処」

「俺の部屋」

マジかよ、と言いなながらも、状況を整理しようとするが、頭が働かない。

「俺、死んだのか？」

「死ぬ一歩手前だ。本来ならこの後、閻魔様に天国か地獄を決められるんだが、お前は、地獄行き決定だ」

「なんでだよ！！」

「天使を殺したからだよ」

「あれは「仕方がなかったはなしだ」……」

上条は納得がいかなかった。

「俺はどうなるんだ？もうインデックスには、会えないのか」

「ああ」

「クソ！！約束したんだ！！もう一度、会って謝るって！！どうにかできないのかよ！！神様なんだから！！」

「無理だ」

「クソ」

上条は疑問に思った。

なんで俺を此処によんだのだろう、と。

「俺をどうするつもりだ！！」

「助けてやる」

「なんで？」

「俺は人間が好きなんだよ。特にお前みたいな奴が」

「見てたのか」

「ああ。なかなか楽しませてもらった。だから、そのお礼だ」

「でも、会えないんだろ」

「生きるのと死ぬの、どっちがいい」

上条は迷わず答えた。

「生きる」

「そうか。じゃあ違う世界に飛ばすから」

「なんでだよ？」

「今な、他の神どもがお前を捜してんだよ。此処もいつ見つかるか判らない」

「どうやって？ 俺の右手には『幻想殺し』があるんだぞ」

上条の右手には、異能の力ならなんでも殺す力が宿っている。

「神様の底力つてのを見せてやるよ」

「その門くぐってさっさといけ。もうそろそろ見つかる」

「色々ありがとな」

そう言つと上条は、いつの間にか目の前にあつた門に向かって歩き出した。

第一話 神様（後書き）

絶対に完結させる。



## 第二話 森の人形使い（アリス・マーガロイド）

「此処どこだ」

（最近、よくこの言葉を呟いている気がする）

とりあえずかみじょうは、地面から体を起こし周りを見渡す。

見渡す限りを緑が覆っていた。

学園都市では味わえない空気を味わいながら、これからどうしようか考える。

（寝床はあのポケットから出せるし）

「新しい幸せを見つける旅でもしますか」

ちなみに神様からもらったポケットには生活必需品が入っていた。

「すげー、上条さん生まれて以来の不幸中の幸いかもしれない」

などと呟き、歩き始めること十分。

上条は、気分が悪くなってきた。

右手で口元を押さえると呼吸が楽になった。

（この森に異能の力でもあるのかよ）

上条は、この世界に来てまだ三十分にも満たない。

だから、この世界のルールや常識などが解らないのだ。

「そうだ、右手の使い方教わったんじゃねえか」

上条は、先ほどの自称神様に、幻想殺しの扱い方を教わったのだっ

た。

（確か消したいものを思うだけでいいんだよな）

口元から右手を放しても先ほどの不快感は、感じられなかった。

歩き続けて数時間。

上条は家を見つけた。

「やっと人が住んでそうなところを見つけた」

上条は、家の人にこの世界についてと、ダメ元で泊めてもらえるか交渉しようと思った。

七色の人形使い、アリス・マーガロイドは紅茶を飲んでいた。

（今日は平和ね）

白黒が御飯を食べに来ることもなく平和な一日終わるはずだった。

コンコン

このノックを聞くまでは。

上条がノックをすると中から声が聞こえてきた。

「誰かしら？」

「えっと、道に迷ってしまって」

流石に違う世界から来ましたとは、口が裂けても言えない。  
なので、あらかじめ考えていた嘘を言った。

そんな事を考えていると中から女性が出てきた。

綺麗な人だなーと、考えていると声をかけられた。

「あなた『外人』ね」

「ガイライジン？」

「入って頂戴。此処が何処だか教えてあげる」

「？」

物凄い急展開に頭をトリップさせながらも、指示に従い上条は、家の中へと入って行った。

**第三話 これ前にもあったような気がする(前書き)**

お気に入り登録数 一件

やる気が上がったのに、文才があがらない……orz。

### 第三話 これ前にもあったような気がする

「ついてきて」

言われるがままに家に入った上条は驚いた。

人形が勝手に動いているのだ。

目の前の少女は、それが当たり前前のように指示をだしていく。

「お客が来たから紅茶を沸かしてちょうだい」

驚いている上条をよそに、次々話を進めていく。

「そこに座って」

「あ、ああ」

「私はアリス・マーガロイドよ。あなたは？」

「俺は上条当麻。外来人つてのがどういふ事が説明してくれないか？」

「ええ、いいわよ。でも、その前に此処がどういふ所か説明しないといけないでしょう」

アリスは人形が持つてきた紅茶の香りを味わいながら説明し始めた。

「此処は幻想郷。すべてを受け入れてくれる場所よ。忘れられたり、スキマに落とされたりしたら此処に来るの。あと魔法使いや鬼、妖怪、吸血鬼、神様も住んでいるわ」

「マジかよ」

「紅茶でも飲みなさい。落ち着くわよ」

「ありがとう。……うめえ」

紅茶に詳しくない上条でもおいしいと思えるほどの味だった。  
アリスはそんな上条を見て

「あなた、以外と落ち着いているわね」

「上条さんは、色々なことに巻き込まれたからもうなれましたよ！

……こんな事に馴れたくはなかった」

アリスは苦笑いを浮かべるしかなかった。

上条は周りで動いている人形達を見て

「お前動かしているのか」

「違うわ。私はあの子たちに魂を入れただけ」

「マジで」

「マジよ」

「そんな事できるのかよ!!」

「これ位普通よ」

(こんな所で幸せ見つかるのかよ)

「？」

「あなた、帰りたいと思わないの？」

「帰れんのかよ!？」

「え、ええ」

上条の異様なテンションの上がりぶりに、弱冠引きながらも答えた。  
それもそのはず。帰れないと思っていたら帰れると言ったのだ。  
嬉しくない、訳が無いだろう。

「今日はもう遅いし、明日連れて行ってあげるわ」

「？何処に」

「博麗神社よ。この幻想郷を覆っている結界、博麗大結界を管理しているところよ」

「そこに行けば帰れるのか？」

「だから帰れるって言うてるでしょう」

「よっしゃー」

「こんな所で叫ばないで！！」

発狂した上条に呆れつつアリスは疑問を口にした。

「なんであの森に居たのに倒れなかったの？」

「ん！！ああ、俺の右手には『幻想殺し』（イマジンプレイカー）  
つてのが宿ってて、異能の力なら神様の奇跡だって打ち消せます。

ハイ」

「ヘーソウナンド」

「なんだよ、その深夜の怪しい通販番組を見ている様な目は！！」

「だって、そんな能力反則じゃない」

「じゃあ異能の力を用意しやがれ。それを打ち消せば、俺の右手だ  
つて信じるだろ？」

「じゃあ、この服。これには私の魔力が練りこんであって、普通の  
怪我とかなら無傷で済ませるようになっているのよ」

何処かで見たとのことのあるやり取りを繰り広げる二人組。

上条は、なぜか心の底から、やめておいたほうが良い、と言う呻き  
が聞こえた、その声を振り払った。

「俺の右手で触って木端微塵になったら、信じるよ！！」

「ええ、信じてあげるわ。本当ならね！！」

カチン

上条の頭からそんな音が聞こえた。

「いいぜ、やってやるうじゃねえか！！」

何かを打ち消す様な甲高い音が鳴り響いたと共に、アリスの服が木端微塵になった。



#### 第四話 いつも不幸（幸せ）（前書き）

シャドウ 夢美さん。感想ありがとうございます。

やる気は上がるんだよやる気は……。

誰か上手になる書き方を教えてほしい、と思う今日このころ。

#### 第四話 いつもの不幸（幸せ）

（上条 side）

私こと、上条当麻は紳士である。

いきなりナニ言ってるんだ？と言っツッコミはやめてほしい。

私こと、上条当麻は紳士である。

重要なことなので二回言いました。

だから、これから語ることは、男に生まれたのなら仕方ない、と思っ  
てほしい。

（やっちまったー！。アニメーゼの時に学習したはずだろ上条当  
麻！！）

心の中で後悔に、押しつぶされそうになっている俺に、問題の光景  
が飛び込んできた。

そう。アリスの下着姿だ。

俺はアリスの下着姿に見とれてしまった。

此処から上条のパンツ描写が入ります。苦手な人は飛ばすことを  
おすすめします。

決して派手ではない……しかし、惹きつけられた眼をそこから逸らすことを決して許さないような、上品なしたぎだった。清楚な純白色である。

際どい形をしているというわけでもない、布面積の数値はむしろ大きいほうだろう。幅も広く、生地も厚いそれである……断じて扇情的ではないし、そういう意味では色気に欠けているといつていいかもしれない。

しかし、そのあまりの白さに俺は眩しささえ憶えた。そして決して地味ではない。

センターの部分には、白地に白い糸で、複雑な模様の刺繍が施されていた……多分花でもあしらっているのだろう。左右対称のその模様は、下着全体のバランスを絶妙に彩っている。そして刺繍の中央上部に、小さなリボンが飾られていた。

そのリボンで全体の印象が更に引き締まる。更にその小さなリボンのすぐ上には、彼女の下腹と可愛らしいへそが見えていた。

以前、土御門と青ピと俺で、下着は黒か白、どちらがエロいか議論したことがあるのだが、その時は黒の方がエロい、と言う結論になったのだが、実際は違った。

結論。両方ともエロかった。

次は、組んでいる腕のせいで（ry

長かったので、省略させていただきました。

私ごと、上条当麻は紳士である。そのことを忘れないでほしい。

side out

上条は、アリスの下着姿の感想をわずか0.2秒ではじき出し、0.3秒で自分が、今すべきことを考えていた。

(俺が今とるべき行動とは!?)

- A 謝る
- B 謝る
- C 謝る
- D 男なら(ry

(やることなんざ最初っから決まってるじゃねえか!!)

上条は靴を脱いで正座をし、頭をこれでもか!!と言うほど地面にこすりつけた。

俗に言う土下座の姿勢を、わずか0.01秒という神速の速さで完成させたのだ。

「すみませんでしたー」  
「……」

アリスが無言で手を前に差し出すと、奥から物騒な物を持った人形達が出てきた。

上条は諦めない。この長年上条の危機を助けてくれた土下座が通用することを信じて。

だが、現実は厳しかった。

怒り狂った少女に通用する謝り方など無かったのだ。

**第四話 いつもの不幸（幸せ）（後書き）**

パンツ描写 知っている人は知っている。

アリスの不幸は加速する。フラグが立つその日まで。

第五話 まだまだ続く（アリス）の不幸（前書き）

博麗神社が遠のいていく……orz

## 第五話 まだまだ続く(アリス)の不幸

「不……幸……だ……」

自分の言つべき事は言ったと言わんばかりに倒れている。

アリスは俯きながら部屋の隅で三角座りをしている。

現在、服の代わりに、膝にかける様な毛布を被っているのだが、重要な部分は隠れているのに際どい部分が露出してエロさが増している。

(どうやって機嫌を良くしてもらおうか?……そうだあの手があるじゃないか。幸い『アレ』もポケットの中にあったし)

あの手とは、インデックスが機嫌を損ねた時によく使っていたあの手段。

『アレ』とは、チョコレートのこと。

そう、上条は物で釣るといふ行為に及ぼうとしていた。

「えゝ姫、もうそろそろ機嫌を直して頂けると、上条さんとしては非常に嬉しいのですが」

「……脱がした本人がナニ言ってるのよ」

(返す言葉が見つからない)

「こちらを差し上げますので許してください」

「……何それ？」

(よし、かかった)

「これは、チョコレートと言いまして、とても甘いお菓子でございます」

「……おいしいの？」

「食べてみるよ」

アリスは毛布を羽織ったまま近づいてくる。

そこで上条は重大な事実気がついた。

(服を……着けていない……だと!?)

自分でやっというてナニ言っただと突っ込みたくなるが、上条は焦り始めた。

(此処で服の話題を持ち出せば俺の作戦が終わりを迎える。だがアリスの心が傷つくよりマシだろ上条当麻!)

自分を奮立たせ、服を着ていない事を告げようとする。意を決して口を開いた。

「服……着たら？」

「~~~~」 / / /

どこの大食いニートシスターの様に噛みつくはけでもなく、ビリビリの様に電撃が飛んでくることもなく、顔を赤くしたまま俯いたまま何かを呟いている。

「服、着るから出て行って」

「ん、なんだって？」

「服、着るから出て行って!」

「わ、悪かった」



上条は顔を赤くしながら怒鳴ったアリスを可愛いと感じてしまった。

\*

アリスが着替え終えたのを確認してから、気を取り直してチョコレートを渡す。

「どうだ、うまいか？」

「ちよっと、甘すぎる気がする」

「んじゃ、こっちはどうだ」

そう言いながら、ポケットから取り出したのは、カカオが少し多めに入っているチョコレート。

「おいしい!!」

「そ、そうか」

普段の彼女では見れない程の笑顔を目にして上条は照れていた。

## 第五話 まだまだ続く（アリス）の不幸（後書き）

どうやってアリスにフラグを立てようか悩んでいます。

一応考えてはいるのですが、何かアイデアがあったら感想の方にも書いて下さると嬉しいです。

**第六話 一人目の被害者（アリス・マーガトロイド）（前書き）**

シャドウ 夢美さん前回は引き続き感想ありがとうございました。

この小説唯一の取り柄、更新速度が……orz。  
いつも以上に駄文な予感がします。

## 第六話 一人目の被害者（アリス・マーガトロイド）

「じゃあ私はお風呂に入ってくるから」

「ああ、解った」

上条はいつの間にか仲良くなった人形達と遊んでいる。  
アリスはそんな光景をしり目にお風呂に向かっていった。  
ある一言を忘れずに。

「覗かないでよ」

「紳士な上条さんがそんなことする訳がないんですよ」

「さっき私の服を脱がしたのは誰だったかしら」

「うっ、そのことは忘れて頂けると、上条さんは嬉しいのでせうが」

フフ、っと笑いながら風呂場へ向かっていった。

\*

大きな浴槽にアリスは浸っていた。

一人では広い、でも、二人では狭いそんな浴槽に。

（彼は……怖がらないかしら。私の正体を知っても）

アリスは不安だった。

自分の正体を知ったら避けられるかもしれないから。

別に上条が好きという訳でわ無いが、避けられるのは誰だって辛い。  
それなら明日帰るのだから言わなければいいのだが、何がきっかけ

でバレるか解らない。

現に察し良い人間にはバレることもある。

だから、隠していることがばれるよりも、自分から言った方が『マシ』だと思うからいつも自分から語るのだ。

自身が妖怪であることを。

(久しぶりに楽しい会話が出来て良かったわ。あのチョコレートと言うのも幾つかくれたし)

風呂から上がり体を拭きながら決心した。ちゃんと伝えよう、と。

\*

風呂から上がって部屋に入ったアリスが見たのは人形に埋もれる上条の姿だった。

なんだか出鼻を挫かれた思いだった。

「アリス、助けてくれ」

「……どうしてそんな事になってるのよ」

アリスは上条をジド目で見つつ尋ねた。

確か、風呂に入る前は一番自立している上海と蓬萊の二人？で遊んでいたはずだった。

「上海と蓬萊の頭を撫でてたら気持ちよかったですらしくて、他の人形たちにも広めだしたんだ!!」

「シャンハイ」

「ホウライ」

「やめる！！飛びつくな！！うわーーーー不幸ーーーーだーーーー」

アリスは呆れつつも上条を助け出した。

上条は息を切らしながら

「窒息死するかと思った」

アリスは苦笑いを浮かべるしかなかった。

\*

人形たちを落ち着かし、アリスが戻ってきた。  
何やら神妙な顔つきをしている。

「話があるんだけど」

「ん。どうした？」

「実は、私、妖怪なのよ」

「ハア！？」

（やっぱり受け入れてくれないのかな……）

アリスがそう思っていると、怯えている様な素振りは一切見せず  
訪ねてきた。

「マジで」

「マジよ」

「妖怪って可愛かったんだ」

上条は妖怪に偏見を持っていた事を悔みながらも、別の偏見を妖怪

に持ってしまった。

全ての妖怪が可愛い訳ねえだろ by 將軍

アリスは自分が可愛いと言われて驚いているようだ。

「可愛いって、誰が？」

「お前以外に誰がいんだよ？」

（落ちて着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け）

アリスは内心が怖いことになりながらも、訪ねてみた。自分が妖怪だと知ってどう思ったかを。

「怖くないの？」

「今、怖くなくなった」

「なんで？」

「だって、お前助けしてくれたじゃないか、俺のことを」

「騙してるのかもしれないのに？」

「じゃあ、騙してるのか？」

「騙して無いけど……けど「少なくともアリスは怖くない」え!？」

「妖怪は怖いけど別にアリスは怖くないだろ。つか、いきなりどうしたんだよ」

するとアリスは涙を流しながら、上条に抱きついてきた。

上条は、何で泣いてんの、俺が悪いの!？、とか思いながら取り敢えず受け止めた。

するとアリスは自分の心中を吐露した。

「また怖がられると思った。とっても不安だった」

「助けてくれた人を怖がってどうすんだよ」

「私をアリス・マーガロイドとして見てくれてありがとう」  
「どういたしまして」

そう言つて上条はアリスに微笑みかけながらアリスが落ち着くまで頭を撫で続けた。

服に右手が当たらないように気をつけながら。

\*

十分ぐらいたつとアリスから規則正しい寝息が聞こえてきた。右手の設定でアリスの服を破らないようにし、抱きかかえる。アリスの寝顔はとても美しかった。

(俺が紳士じゃなかったら襲つてるぞ)

服破つといてナニぬかしてんだ、と言いたくなるがそんなツッコミをできる人物は此処には居ない。

人形達にベットの場所に案内してもらい寝かせたまでは良かった。

そう、ここまでは。

アリスが上条の服の端を掴んではなさいのだ。

上条は手を外そうと努力するも妖怪の腕力には勝てなかった。

(これは俺に寝るなど言っているのか？神は乗り越えられる試練しか与えないんじゃないのか!?)

そこから数時間頑張った上条の努力も虚しく意識は無かった。



第六話 一人目の被害者（アリス・マーガトロイド）（後書き）

キャラ崩壊しましたね。

以降もこんな滅茶苦茶なフラグの立て方になりますが一歩よろしいですか？

意見などがある場合は感想のほうでお願いします。

あと、このキャラはこういう理由で惚れた方がいい、と思うことがあります。ありましたら参考までに聞かせて頂けると非常に嬉しいです。

**第七話 これなら何時記憶を失っても大丈夫だぜ by上条当麻(前書き)**

マサトさん、ご意見ありがとうございます。

一人何回でもいいので思いついたらまた書き込んでください。

第七話 これなら何時記憶を失っても大丈夫だぜ by上条当麻

＼上条side＼

皆、聞いてくれ！！

ありのままの状況を話すぞ。

朝起きたらアリスに抱きつかれてるんだ！！

こいつナニぬかしてやがる、みたいな目で見ないでくれ！！

俺は紳士だ。

自他共に認める程の紳士なんだ。

でも朝からこんなもん見せられたら、なあ？

紳士と言う名の鈍感ですね、解ります by將軍

……今、俺以外の咳きが聞こえたが気にしないでくれ。

幾ら俺が『キング・オブ・the・紳士』の名をほしいがままにしてるからって耐えられない時もあるんだ！！

皆も男ならわかるだろ！？

だってアリスの寝顔は 長いので省かせて頂きました。

＼side out＼

取り敢えず上条はアリスを揺さぶって起こす。

が、中々起きてくれない。というか、あと五分とまで言う始末である。

「おい、起きろ」

「うーん、あと五分」

「そんなお決まりのセリフ言っていないでさっさと起きろ」

「あと、気分」

「どれだけ寝る気だよ」

「四十八億年くらい」

「それ、地球がもう一個できるぞ」

アリスは、はっ、と言つ驚き声と共に飛び起き素朴な疑問を口にした。

「なんで、あなたが此処に居るのよ!？」

「いや、此処まで運んだのは良かったんだけど、そのあとお前放してくれなくてさ」

アリスは、ボンツ、と言つ効果音がとても似合うようなほど顔を真っ赤にして布団に潜り込んだ。

昨日の自分の行動が恥ずかしすぎて。

目が覚めてくると共に、色々な事を思い出していく。

ちなみに上条の服の裾を放さなかったのはわざとだ。

(何であんなことしたよの、馬鹿)

自己嫌悪に陥りながらも落ち着きを取り戻していった。

\*

朝食を雑談を交えながら終えた二人は神社へ赴く準備をしていた。その途中で上条はあることを思いついた。それは日記を書くと言つことだ。

此処での思い出を必ず忘れないように、と。  
日記を書いているととても良いことを思いついた。  
これなら完璧と言えるほどに。

「アリス、写真を撮らないか？」

「写真？何それ、おいしいの？」

「喰い物じゃねえよ」

ハハハ、と上条は笑った、アリスもそれに釣られて笑いながら思った。

ああ、本当にこの少年と居ると楽しいな、と。

あと少しで終わってしまう幸せを噛みしめながら尋ねる。

「で、それって何？」

「風景を写すことができるんだ。ま、実際にやってみた方が早いだろう。そこに並んでくれ」

「家の前でいいの？」

「うん、もうチョイこっち、そこそこ」

上条がぼたんを押すとフラッシュがきられる。

アリスは初めてのことだから驚いて尻もちをついている。

上条は微笑みながら手を差し伸べる。

「光るなら光るって言ってよ」

「悪かったて。ほら見てみるよ」

そこには尻もちをついているアリスと人形達が映っていた。

「いい思い出が出来たわ」

「私にしたら最悪よ、ねえ、二人で映らない？」

「もともとそのつもりだよ」

人形にカメラを任せて並んでみるも、二人ともどうもぎこちない笑みを浮かべている。

上条は、御坂と写真を撮った時もこんな感じだったと思うと、このままじゃ埒が明かないので大胆な行動にでた。

アリスを抱きよせたのだ。

アリスが顔を真っ赤にしている所でシャッターがきられた。

その写真に上条はとても満足し、アリスは、黒歴史増えた…… or z、などと呟いていた。

「その写真私にもくれない？」

「ああ、いいぜ（その場で現像とは流石学園都市製品）」

「ありがとう。それじゃ行きましょうか」

「ついてきてくれるのか？」

「場所解るの？」

「……お願いします」

本当は彼と一緒に居たいだけだが、そう思いながら博麗神社をめざした。

**第七話** これなら何時記憶を失っても大丈夫だぜ **b y**上条当麻(後書き)

やっと博麗神社だー！。

でも、ついでからの展開あまり考えてない……orz。

第八話 これからどうしようか…… b Y上条当麻(前書き)

カラーさん、マサトさん感想ありがとうございます。

あと、アリスは墜落しました(フラグ的な意味で) W W W。

今回はいつも以上に酷い出来となっております。



第八話 これからどうしようか…… by上条当麻

「此处が博麗神社よ」

「なんか……思ったより普通だな」

上条の『知識』としてある記憶のものと一致している。

鳥居があり、賽銭箱もある。

上条のイメージとしては、結界の外に繋がてくれる場所だから神社と言つ名の別の何かを想像していたのだが。

一つ記憶の中にあること違つと言えば、此处までの道のりだ。

来る途中何回か妖怪に遭遇するもアリスの指示に従つて事なきを得たが、こんな所に参拝客は来るのだろうか？と上条は思う。

「神社が普通じゃない神社ってどんな神社よ」

「それもそうだな」

境内に入ると目に入ってくるのはお賽銭箱。

(はっ!!もしかしたら此处でお参りしたらちよつとは不幸じゃなくなるんじゃない!!)

そう思った上条は賽銭箱に近づいていき

「お参りでもするの?」

「ああ、日ごろの不幸が減るかも知れないからな」

アリスは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「今日はケチらずに入れるぞ」

そう言つて財布から十五円を取り出した。  
十分にご縁がありますように、と言つ意味らしい。

「私から見たらケチってるようにしか見えないけど。しかも此処のお金じゃないし」

「十円を笑うやつは、十円に泣くぞ。あと、こういうのは金額の問題じゃないだろ」

「そうだけど……」

天使を殺しておいて何神様に縋つてんだよ、と言いたくなるがそのことを知る者は此処には居ない。

チャリン。そんな音と共に賽銭箱の奥へと入っていくお金。

その刹那何かが現れた。

「今、お金入れたの誰!? ねえ」

「……俺だけど」

上条が弱冠引きながら答えるといきなりてを握つてきた。

「お被いもする!! 今なら安くしてあげるから!! ねえ」

「取り敢えず落ち着けて。てゆうかお被いつて金とんのかよ!!」

「当たり前でしょ。そつでもしないと食べていけないんだから」

マジかよと呻きながら飛び出してきた少女を見ると巫女服を着ていた。

知り合いに巫女服着た奴が居た様な気がする、と思ひながらも目の前の少女に違和感を覚えた。

何故なら腋が露出しているからだ。

「なあ、アリス何で腋が露出してるんだ？」  
「知るわけないじゃない」

これが普通なんだと思い込み話を進める。

「霊夢、彼外来人なの結界を開いてくれない」

「いいわよ、今凄く機嫌いいから」

（機嫌の問題かよ！！）

と、凄くツツコミたくなつたが、その所為で機嫌を悪くして帰れなくなつた、と言うのは嫌なのでがまんする。

「向こうよりこっちの方が素敵だと思うのに何で帰るのかしら」

「妖怪が居るからでしょ」

「向こうは平和すぎるのよ」

巫女とは思えない発言を聞きながらも疑問に思う。

平和すぎる？ついこの間戦争が起きたのに何を言ってるんだと思う。アリスによれば結界の外の情報も少しは入ってくるらしい。上条は一つの可能性を否定するため目の前の少女たち問う。

「この前、戦争が起きた所だろ。何で平和って言ってられんだよ」

「何言ってるのはそっちよ私が生まれる前に大きい戦争が二回あったけどそれ以降、大きな戦争は無いって聞いてるけど」

「じゃあ、学園都市はそれなら「知らない」……マジかよ」

そこまで聞いて上条は唐突に思い出す。

神様の言っていたことを。

つまり、此処は俺がいた世界じゃないということ悟った。

「で、帰るんでしょう何うずくまってるのよ」

「此処、俺がいた世界じゃないんだよ」

「はあ、いきなり何言ってるのよ」

「俺のいた世界ではついこの間戦争が起きた。大きすぎる戦争が。なのに、此処じゃ起きてないって言われたし、学園都市も無いんだつたら此処は俺の居た世界じゃない」

そういつた瞬間、今まで此処に来て支えてくれていたものがなくなつた様な気がした。

(薄々気づいていたけど、やっぱりきついな)

「大丈夫？」

アリスが心配してかこちらを覗きこんでいた。

上条は出来る限りの笑みを返そうとする見ていて痛々しいものだった。

「で、これからどうするの此処に住む？それとも結界の外で住む？」

「こっちで住む事にするよ。結界の外に行っても知り合いとかいないし」

「そう。で何処に住むの？」

「これから、ゆっくり考えるさ」

「それは困ります」

唐突に第三者の声が聞こえた。

第八話 これからどうしようか…… by上条当麻（後書き）

誰か小説の書き方を教えてくれ……orz。

やる気だけが上がって文才は全く上がらない。  
こんな小説を読んで頂ける皆様に感謝です。

第九話 幻想郷は全てを受け入れるわ by八雲紫（前書き）

楸さん、袖口さん、マサトさん感想ありがとうございます。

やる気は凄く、物凄く上がるんだよ……このやる気を文才に移した  
iorz。

最近、iorzばつか使ってる気がする。

第九話 幻想郷は全てを受け入れるわ by八雲紫

「何しに来たのよ……紫」

「ちよつとその子に用があつて」

そう言いながら日傘の先を上条に向ける。

「なあ、この人誰？」

「八雲紫。この幻想郷を作つた張本人であり管理人でもある物よ。

あと人じゃなくて妖怪ね」

（妖怪つてやつぱり皆美人なのか？）

上条が馬鹿なことを考えている間にも話は進んでいく。

「あなたに此処（幻想郷）に居てもらつと困るのよ。主にその右手がね」

「なあ、頼むよ。此処に住まわせてくれないか？結界に触れなきや大丈夫なんだろ」

「その右手を切り落とすなら考えてもいいけど……」

「さらりと物騒なこと言うなよ！！」

まあ、きつても生えてくるけどねwww by將軍

「此処は全てを受け入れてくれるんだろ？」

「……それを言われれば何も言えないわね……まあ、その右手について説明してくれる？それなら幻想郷に住む事を認めます」

「マジか。俺の右手には……」

少年説明中……

「じゃあ、絶対に結界に近づかないでね、それじゃ」

幾ら美人でもたくさん目の目がこちらを覗いているスキマに入るシーンはシュールな光景だった。  
上条はこっちに来てから女の人としかあつてないな、なんて呑気事をかんがえている。

\*

「で、これからどうするの?」

「もう夜だし私は人形達のこともあるし帰るわ。またね」

「おー、またな、アリス!! って飛んでる」

「幻想郷のほとんどの人は飛べるわよ」

「ほんと規格外だな」

「「アンタに言われたくねーよ」「」

口をそろえて二人の少女に突っ込まれた。

「わざわざ、歩きにつき合わせて悪かったな」

「いいのよ、私も楽しかったし。じゃあまた明日」

「ああ、また明日」

アリスを見送り終わると霊夢と今後についてを話し合う。

霊夢は心底めんどくさそうな表情をしていたが、ちゃんと話は聞い



てくれた。

「で、今日はもう遅いし泊まってく？」

「博麗が良いんだったらお言葉に甘えようかな」

長い、長い夜の始まりを告げる合図だった。

此処から始まる自分に襲いかかる不幸を霊夢はまだ知らない。

第九話 幻想郷は全てを受け入れるわ by八雲紫（後書き）

さて、二回目のフラグイベントです。

何か霊夢の不幸（上条のラッキースケベ）を思いついた方はどんどん書き込んでください。我らが第一級フラグ建築士、上条当麻さんが頑張ってくださいwww。

第十話 霊夢の不幸（前書き）

シャドウ 夢美さん、マサトさん感想ありがとうございます。

マサトさんのネタはありがたく使わせて頂きました。

## 第十話 霊夢の不幸

「で、上条さん料理出来る？」

「まあ、一人暮らしだったしある程度は」

上条の中で人の定義は少し、どんな些細なことでも何かを手伝う人だ。

家で喰っちゃ寝しているニートシスターは、上条の中では人じゃない、ということになった。

「じゃあ、今日の晩御飯任せたわよ」

「ハア！！」

「ハア！！じゃなくて泊めてもらうんだからそれぐらいしてくれるでしょ。それとも、今から出ていく？」

外は完全に真っ暗で妖怪が出てきてもおかしくない状況だった。

上条の中で霊夢＝腹黒という定理が定まった。

「喜んでやらせて頂きます（ま、考えたら当然だよな。泊めてくれるんだし。俺は『アノ』ニートシスターの様にはならない。絶対に）」

「それでいい」

霊夢は満足そうに居間へ戻って行った。

\*

もう夜も遅いのでなるべく早く作ろう、と思っていた所でいい案が思いついた。

神様から貰ったポケットを漁って学園都市製冷凍食品『プロも認めたまさ』シリーズを出す。

(そういえば嫌いな物とか有るかな?) 「なあ、博麗。嫌い物とか有るか、あと何食べたい?」

「食べ物ならなんでも食べるわよ、あと、和食なら何でもいい」

ポケットの中から煮魚、豆、お味噌汁、漬物などの物を引っ張り出す。

あとはこれを温めるだけだ。幸い御飯は霊夢が焚いていたらしい。

「それなに?」

霊夢がいつの間にか上条の後ろに居て始めてみる物たちに興味を示す。

「うお、足音立てずにくんなよ」

「仕方ないじゃない。小さい時から巫女の音をたてない歩き方って言うのを教えられたんだから。で、それなに」

「ああ、これは温めるだけで料理が出来るんだよ」

「それ何処で売ってるの? ねえ!! ねえ!!」

「どんだけめんどくさがりなんだよ!! まあ、結界の外なら売っているとおもっけど。あと、ちょっとで出来るから向こうで待ってる」

\*

「なあ、皿ってどれ使えばいい?」

「うん。じゃあそれで」  
「解った」

上条にしては珍しく特に何もなく進んでいく。

あゝ、不幸が無いっていいな、なんて思ったのが運のつき。  
まるで、待つてましたの如く何も無いところで躓く。しかも霊夢を  
巻き込んで。

へ？何。きゃっ、と言う可愛らしい驚きの声とともに倒れていく。

上条 side

久しぶりだな皆。

また聞いてくれ。

なんと倒れたのは霊夢の胸の上だったんだ！！

狙った訳でもないのにあの少ない谷間スッポリハマったんだ。

いや、そこから叫び声と共に世界を狙えるような右ストレートが飛  
んできたよ。

side out

「悪かった。だから機嫌直してくれよ」

「お前も解るだろ？不可抗力なんだって、さっきのは」

「……………」  
「……………」  
（これはまた『アノ』作戦で行くしかないな）

以前、アリスにもやって成功した、物で釣る、と言う作戦だ。

(博麗も女の子。だからあいつの興味を引けて尚且つ甘いものを思い浮かべる)

上条の頭の中で推理が始まった。

(博麗は夕食の時和食を選らんだ。ということはお茶にあう和菓子を探せばいいんだ。何を出そうか?)

悩み悩んだ末に決まったのが芋羊羹。

理由 自分も食べたいから、と言う不純な理由だが決行した。

「姫。こちらを差し上げますのでどうか機嫌を直してくれると嬉しいのですが」

「……何それ」

「とっても甘いものでございます」

「……もういいわ。わざとじゃいんどしょ」

「当たり前だろ。紳士な上条さんがするわけねーだろ」

\*

「じゃあお風呂入ってくるから」

「ああ、皿洗いしとくよ」

「ありがとね」

「どづいたしまして」

本当の悲劇は(霊夢の) 此処から始まる。

## 第十話 靈夢の不幸（後書き）

シャドウ 夢美さんの『外の世界は禁書世界じゃないんですか？』  
と言っ質問ですが、ご察しのとおり別世界です。

ここからggdggdで無茶苦茶な理由のフラグが建つ予定です。  
何か思いついた方は、まだ間に合いますのでご意見の方よろしくお  
ねがいします。



第十一話 二人目の被害者（博麗 霊夢）（前書き）

マサトさん感想ありがとうございます。

今回もいつも以上にgdgdなうえにホントに唐突です。

第十一話 二人目の被害者（博麗 霊夢）

「あゝ皿も洗い終わったし、暇だな」

上条はそう言いながら芋羊羹を頬張る。

少しぐらい貰っても罰は当たらないと思って。

\*

「あゝ、ヤバイ。マジでヤバイ。トイレ何処だよ!？」

上条は貞操の危機に晒されていた。

高校生にもなってお漏らしとかわからねえー、と思いながら。

「此処か」

そう言っただけ扉を開けてた先には霊夢がいた。

ついでに言つとサラシを巻いている途中。

（あれゝトイレ探してるだけなんだけどな）

謝罪の言葉げ出る前に、右ストレートが上条の顔面を捉えた。

\*

「悪かった」

「何のこと」

「いや、風呂b「なんのこと」

（記憶が消し去りたいのに!!）

（話題を変えなければ……そうだ!!さっきの芋羊羹があるじゃないか!!）

「これ食べるか？」

「（唐突に話題を変えたわねあ）もらつとくわ」

なんとか話題を変える事には成功したが会話が続かない。

そこで上条は、ああこれをやってもらおうと思いつく。

「なあ、お被いやつてくれないか」

「お金、あるの？」

「やっぱりとるのかよ」

「当たり前じゃない」

「何円？」

「円じゃなくて文。幻想郷じゃあ文がお金の単位よ。多分、森近さんに頼んだら両替してくれるわ」

「やることがたくさんあるな」

本来の話題からどんどん話がそれていくが、会話が続くならいいか、と割り切る。

そこで前から思っていた疑問をくちにする。

「他に誰も住んでないのか？」

「ええ、私だけよ」

「……淋しくないのか？」

「もう慣れたわ」

もう慣れた、と言うのは嘘で、『主に空を飛ぶ程度の能力』を使って本人も無意識のうちに誤魔化しているだけだ。上条はそれを知ってか、知らずか会話を続けた。

「淋しい事に馴れたとか無いだろ」

「何よ！！淋しくないって言ったら淋しくな「お疲れさん」え！？」

いきなり抱き寄せられた。上条に。

その瞬間、右手に触れ霊夢を支えるものが無くなると急に涙が溢れてきた。

上条は霊夢が落ち着くまで背中を擦り続け、慰めの言葉を送っていた。

一週間に一度は会いに来るなどの言葉を。

第十一話 二人目の被害者（博麗 霊夢）（後書き）

次の被害者は白黒かせんせーかな、と思う今日この頃。文才が欲しい。

PS やつと十話……先が思いやられる……。

第十二話 三人目の被害者（霧雨 魔理沙）（前書き）

マサトさん感想ありがとうございます。

昨日、投稿し忘れた……orz。

## 第十二話 三人目の被害者（霧雨 魔理沙）

「うーん、これからどうしようか」

現在、上条当麻は博麗神社の境内を散歩していた。

アリスがやってくるまでの暇つぶし中だ。

すると遠くの方から何かが飛んで近づいてくるから、アリスか？、  
と思ったが距離が近づくにつれ違うことが解った。

「よう、霊夢！！遊びに……お前誰？」

「こっちのセリフだよ！！」

出会い頭に上条のセリフを奪った。

（うわ、コスプレ！！でも、腋が露出している巫女服もあったしこ  
れが普通なのか？）

上条にどんどん幻想郷の間違ったイメージが定着していく。

「私は霧雨魔理沙。んでお前は？」

「上条だよ、上条当麻。外来人つて奴だ」

目の前少女はエプロンドレスと言っやつを着ている。  
それは絵本に出てくる魔女を想像させる格好だった。

「霊夢は居るか？」

「あゝ中に居ると思っぞ」

「ありがとな。じゃっ」

「何ていうか、お転婆って言葉が似合いそうだな」

少女は少年のあいさつも聞かずに家の中へ入って行った。  
俗に言う不法侵入だ。

\*

現在、上条、霊夢、魔理沙でお茶を啜っている。

「なあ、これからずっと此処（幻想郷）に住むのかよ？」

「俺はそのつもりだ」

「やっぱ人里に住むのか？」

「ああ、ま、家決まったら旅するつもりだけど」

「え、一週間に一回来てくれるんじゃないの!？」

「ちゃんと来てやるから安心しろ」

霊夢は顔を赤くしながら、あげた腰を下ろした。

魔理沙はそんな霊夢を見て上条に尋ねる。

「なあ、お前、霊夢になんかしたの？」

「いや、なんもやってないけど」

流石、『キング・オブ・ザ・鈍感』を持つ男、上条当麻。

霊夢はこれからライバルが多くなる事を想像していた。

「んで、その右手の能力ってほんとうなのか？」

「ああ、本当だ」

「じゃあ、弾幕ごっこしようぜ!!--」

「なんだよそれ」



「私と紫が作った人間と妖怪が対等に戦えるようになるゲームよ」

少女説明中……

(ま、消せるから問題無いと思うけど)

「じゃ、準備はいいか」

「何時でもいいぞ」

「始め」

霊夢の開始の合図と共に魔理沙から弾幕が放たれる。

上条はそれを見て絶句した。絶絶句句した。

多すぎるのだ、玉の数が。

しかも魔理沙は飛んでいる。

こちらの攻撃など一切通らない。

魔理沙の弾幕に右手の領域を広げて対処する。

「な！？せけーぞ！！」

「お前だって空飛んでんだろ」

「私は魔女だからな」

「答えになつてねえよ！！」

叫びつつも領域が勝手に弾幕を消していく。

\*

10分ぐらい魔理沙が打って上条消すというやりとりをして変化が訪れた。

魔理沙が涙を堪えながら弾幕を撃っているのだ。

(あるえ〜俺なんかした!?)

上条は魔理沙に事情を聴くために、筥の空を飛ぶ魔法を打ち消すが、魔理沙の居る所は、地上から約10メートル。危険なことこの上ない。

上条は魔理沙の元へ領域オフにして駆け寄る。

魔理沙はなんとか体制を立て直して無事だった。

「おい!!大丈夫か!?!」

「恋符「マスタースパーク」」

いきなりスペルを宣言し、上条に向けて極太のレーザーが走る。

突然の事で領域を発動できず、右手で受け止める。

(これにはトラウマしかねえよ)

それはファイアンマが上条に向けて使用した『竜王の殺息』(ドラゴン・ブレス)にとても似ていた。

右手から血が出るがなんとか防ぎきる。

「魔砲「ファイナルスパーク」」

「!!!」

咄嗟に右手を構える。

さっきよりも威力が上がっているようだ。

それを受けきれないと判断した上条は、光線に対し、九十度直角の

位置へと移動するべく、右手を中心にあしを運ぶ。

そして光線から右手を離れた。

直後、上条がさっきまで居た位置の後ろの木々はなぎ倒され、荒地となっていた。

上条は、魔理沙に、殺す気がこの野郎！？、と、言いたい所だが、取り敢えず泣いている理由を聞く。

「何で泣いてんだよ」

「……勝てると思った」

「ん？」

「努力で才能に勝てると思った。でも、負けた」

「努力で強くなれるならいいじゃねえか」

「え！？」

「俺なんて打ち消す事しかできない。努力で強くなれるお前が羨ましい」

「でも、結局負けたし」

「努力したらまた強くなるんだろ？ほら見てみるよ」

上条は、魔理沙のスペルを二回受け止めて、ボロボロの血だらけになつた右手を見せる。

「お前の弾幕きつかったぜ。これでまだ強くなるんだつたらもう勝てねえよ」

「……ありがとな。元気でた」

上条は右手を魔理沙に差し出す。

魔理沙はその右手を掴んで立つて、不吉な事を宣言した。

「お前の右手をぶつた切るまで諦めないぜ……！」

「不吉な事宣言してんじゃねえよ……！」

そんなやり取りを空気を読んで見守る影が二つあった。

一人は博麗霊夢。

もう一人は途中で合流したアリス・マーガロイド。

（こいつ、また建てやがった）

「これから増えるかもしれないわね。しかも一番達が悪い無自覚」

「

第十二話 三人目の被害者（霧雨 魔理沙）（後書き）

初の戦闘描写。難しすぎる。他の人どうやって書いてんだよ。

なんかアドバイスありましたら教えてください。  
あと、ネタも。

**第十三話 平和的な戦争（主に女性の間で）（前書き）**

楸さん、earthさん、マサトさん感想ありがとうございます。

質問などは後書きまで返答させていただきます。

### 第十三話 平和的な戦争（主に女性の間で）

「は、朝から不幸だ。ダイードの主人公もこんな朝は迎えていないと思う」

朝から手に包帯を巻くというジョー・マクレーンもビックリな不幸を持つ少年、上条当麻は現在、霊夢、魔理沙とさつき合流したアリスと共に人里へと移動中である。

「だから、さつきから謝ってるじゃないか」

「謝って傷が治るなら包帯は要りません!!」

「なに、警察は要りません、みたいなこと言ってるんだよ」

「当麻大丈夫？（ここで皆と差をつける）」

と、わざわざ今の場を修羅場状態へと持ち込んだのは霊夢だった。魔理沙とアリスは、そんな霊夢を見て対策を練る。が、思いつかない。

「ああ、心配してくれてありがとな博」「霊夢でいいわよ。博麗何て呼びにくいでしょ」「……霊夢」

（（コイツ出来る!!））

（このままじゃマズイはねなんとかしないと……そうだ!!）

「当麻、人里に着いたら包帯の巻き方を教えたあげるわ。ほっといても怪我しそうだから」

「否定できないのが悲しい」

（よし、後で二人きりになる糸口を見つけた）

もかしかして、今私が一番不利!!と、魔理沙は危機感を覚えるが名案を思いつく。

「上条、今日のお詫びしたいから今度私の家に来いよ。なんかキノ料理作ってやるからさ」  
「マジで！！俺キノ結構好きなんだよな」  
（（（コイツら邪魔しやがって）））

この修羅場に気付かない上条を放っておいて物語はどんどん進んでいく。

\*

「やっと着いた。何処に行くにしても遠いな」

「あー！！ごめん！！これ渡すの忘れてた」

霊夢がお札と数珠を取り出す。

上条は右手ではなく、左手で受け取る。

「これなんだ？」

「お札の方が結界の様なもので野宿の時テントにでも貼っておいたら雑魚は近寄らないわ。あとそっちの数珠は着けたら飛べるようになるわ。どっちも右手で触っちゃいけないわよ」

「ありがとな」

そう言って霊夢の頭を撫でる上条。

魔理沙とアリスは羨ましそうに見ているが何もできない。

（こつこつ所で差をつけていけば……）



などと腹黒ことを考えている霊夢に気付かず頭を撫で続ける上条。  
そこでアリスが行動を起こした。  
倒れるように見せかけて上条の腕に抱きついた。

「おい、大丈夫か」

「ごめんなさい。久しぶりにこんなに長く歩いたから」

「付き合わせて悪かったな」

「ううん、大丈夫よ」

と、言い立ちあがろうとするがそこでわざとらしく上条にもう一度倒れこむ。

「は、ほら背負ってやるから」

「……でも」(計画通り)

「きにすんなって」

「じゃあ、お言葉に甘えて」(うわ、滅茶苦茶軽い)

「ちょっと、待ちなさいよ。当麻だって疲れてるんだから」

「いいよ、俺のためわざわざ歩いてくれたんだし」

「アリス!! 飛べばいいじゃないか!!」

「コイツも疲れてんだろ。ほら、後ちょっとだし大丈夫だから」

霊夢と魔理沙が反論するも、上条は取り合わない。

背中のアリスは今がチャンスとばかりに上条の背中に抱きつく。  
胸をあてるようにして。

「アリス……上条さんの背中に当たってるんでせうが……」

「落ちそうなのよ」

(絶対わざとだ)

霊夢と魔理沙は反撃の手段を探しながら上条についていく。

### 第十三話 平和的な戦争（主に女性の間で）（後書き）

earthさんからの質問ですが、『確か上条さんは22巻終了時までは打ち消しきれない時には「掴んで逸らす」という技術を身に付けていたはずですが、なぜわざわざ横にずれるということをしたのですか？』という質問ですが、これは掴めない攻撃だからです。作中で魔理沙が放ったスペル、「魔砲」「ファイナルスパーク」とは孫悟空もビックリなかめはめ波を想像してください。

掴めませんねwwwだから受け止めたのです。解って頂けましたか？質問があれば感想の方どうぞ。

**第十四話 慧音さんって寮の管理人みたいな人だよ、滅茶苦茶俺の好みなんだ**

感想覧の返信ボタンやっと気がついた今日この頃。

今回は、滅茶苦茶短いです。

第十四話 慧音さんって寮の管理人みたいな人だよ、滅茶苦茶俺の好みなんだ

「此処が寺小屋か」

「行きましよう。多分、中に守護者が居ると思うから」

アリスに続いて上条の犠牲者たちが寺小屋へと入っていく。中では上条のストライクゾーンの女性が授業を行っていた。授業を行っている女性はこちらを見て、要件があるなら授業の後にしてほしい、ということなので待たせてもらうことにした。

\*

「君らが此処に来るなんて珍しいな。その少年は誰だい？」

「上条当麻さんって言って外人だから、住む所を紹介してあげて」

「別に住む所は用意できるが、外人なら何故外に返さないんだ？」

「まあ、色々あって……」

少年少女説明中……

「そうか、君も災難だったな。困った事があつたら言ってくれ」

「ありがとうございます。えと……」

「上白沢慧音だ」

「よろしく願います上白沢さん」

「無理して敬語は使わないでいいぞ」

「上条当麻だ。まあ、色々とよろしく」

慧音が右手を差し出したので、上条も右手を差し出しそれに応じる。

\*

「空家があるんだが大分前から使われて無くてな、掃除しないと使えないんだ」

「無料で使わしてくれるんだそれぐらいするさ」

現在、上条と慧音は明日から上条が住まう予定の家を見学している。ちなみに霊夢、魔理沙、アリスは遅いので帰って行った。

明日、三人とも掃除を手伝うと言って帰って行った。

**第十四話 慧音さんって寮の管理人みたいな人だよ、滅茶苦茶俺の好みなんだ**

次回からせんせーのフラグを立てる訳ですが、ネタがあつたら言つてください。作者のネタが尽きそうです。

慧音さんの口調は当ってますか？間違っていたら指摘してください。

第十五話 四人目の被害者（上白沢慧音）（前書き）

カラーさん、キラさん、マサトさん感想ありがとうございました。

アリスと似たような立てかたになってしまった……orz。

## 第十五話 四人目の被害者（上白沢慧音）

「これは酷いな……」

目の前の家の惨状を目の当たりにしてその声を漏らしてしまう。

「今日は私の家に泊まるといい」

「え、いいんですか!？」

「この家で寝るのか？」

「泊まらせて頂きます」

慧音は知らなかった。

上条が泊まる＝フラグ立つという事を。

\*

「最初に言っておくが私は半人半妖だ。怖かったら違う家を紹介するがどうする」

「そうなんですか。やっぱり男の俺が泊まったらマズイのか？」

「そういう意味じゃない。君は外来人なんだろう？妖怪が怖くないのか？」

「アリスに言ったんだけど、自分を助けてくれる人を怖がってどうすんだよ」

「……君は受け入れるのが早いな」

「上白沢が優しいだけだよ」

どこか遠い目をしながら慧音が昔の事を語っていく。



「里の皆は今でこそ子供を私に預けてくれるようになったが、昔は中々受け入れてくれなかった。君みたいに会って間もないのに受け入れてくれた人は初めてだ。それに半人半妖だから妖怪のほうにも拒絶されてな」

「だから、上白沢が優しいからだって」

「君も優しいな……」

そう呟く慧音の瞳から涙が溢れだした。

上条は驚きながらも何故泣いているのかを尋ねた。

「また、拒絶されると思っていたら、いきなり優しい言葉をかけられたからな。本当に不意打ちだったよ」

「上条さんはそんな酷い事しません。てゆうか人を勝手に値踏みしてんじゃねーよ」

本当に全部受け入れてるんだなー、と感心する上条。

前に、八雲紫がいつていた言葉、『幻想郷こゝはすべてを受け入れるわ』。まさにその通りだと思った。

受け入れるだけで何もしない。

本当に、本当に残酷なことだった。

傷つこうが、楽しもうが全てを受け入れる。

結果だけを。

そんな事を上条が考えていると慧音が声を掛けた。

「君は本当に優しいな……。ちょっと胸を貸してくれないか」

「私目でよければ」

色々と危ない発言だが、いま、それをツツコムのは野暮だろう。

ゆっくりと慧音が上条に近づき、上条の胸に抱きつく。

上条は理性を頑張つて保ち続けていた。

\*

そんなこんなで夕食を食べ終え、風呂に入つて、あとは寝るだけになつて上条が今日はもう眠いから歯ブラシではなく、口を濯ぐだけでオーケーな学園都市製デンオンをポケットから取り出すと慧音がそれに興味を示す。

「なあ、当麻。それはなんだ？」

「歯磨きの代わりだよ」

「そんなもので出来るのか!?!」

「ああ、使つてみるか？」

上条が尋ねると当然と言わんばかりに首を上下させる慧音。

上条は慧音に使い方の説明していく。

「これ液体をこの蓋ぐらいまでいれて、口に含んで濯ぐだけでいい。飲んだらダメだよ」

「解つた。貸してくれ」

早くしろ、と言わんばかりに押しよってくる慧音の以外な一面を見て喜びながら準備をしていく。

準備と言つても液体を注ぐだけだが。

「はい」

「ありがとう」

上条から受け取った液体を一気に口に含む。

そこで慧音を未知の感覚が遅い一気に吐き出す。

「おい!!どうしたんだよ!!」

「ひみはよくほんはものをふかへるな」(君は、よくこんなものを使えるな)

慧音の舌をヒリヒリと、スースーとした感覚が襲う。

ちなみに、今の慧音は、口を開けっ放しにして、途中で吐き出したものが衣服を濡らし、とてもエロい状況になっている。

(耐える、耐えるんだ俺!!此処で負けるな俺の理性!!)

\*

今は慧音が服を着替え終え、後寝るだけとなった。  
が、一つ問題があった。

「なあ、上白s「慧音だ」……上「慧音だ」……上「……なんで、慧音って呼んでくれないんだ?」

涙目+上目づかい=女性の最強技  
この方程式は何処でも共通だった。

「慧音……、何で布団が一つしかねえんだよ!!」

「私は一人暮らしたぞ!!!」

「なんでそれを威張った!?!」

すると慧音は先ほどの必殺技を使いながら言った。

「一緒に寝てほしいんだ」

「……………」

鉄の理性など、あっても無いに等しかった。

第十五話 四人目の被害者（上白沢慧音）（後書き）

後は、家掃除 コーりん 天狗 原作……滅茶苦茶なげえ！！  
早く原作に入りたいのに……orz。

てゆうか天狗にフラグとか何処の無理ゲー！！

と、言う事でパパラッチもとい射命丸さんのフラグの立て方を募集  
中！！

マジでなんも思いつかないのでよろしく頼みます！！

P・S 明日は用事があるので投稿できるか解りません。

第十六話 掃除って面倒だよね b y 將軍(前書き)

マサトさん感想ありがとうございます。

サブタイトルが思いつかない……orz。

文のフラグは引き続き募集中なので思いついたら気軽に書き込んでください。

第十六話 掃除って面倒だよね b y 將軍

「さて、始めますか」

そう言つて上条は自分に気合を入れる。

現在、霊夢、魔理沙、アリスで掃除を始めようとしている。  
慧音は授業があるので来ていない。

「取り敢えず中の物全部出すか」

「ええ、それから始めましょう」

上条の案にアリスが同意して予定が決まる。

\*

「終わったー！ー！！」

上条はつい叫んでしまう。

それもそのはず、家の中には、どうすればこの部屋にこの量が収まるのだろう、と思うほどのガラクタがたまっていたからだ。

「次は埃か」

魔理沙が面倒臭そうに呟く。

「埃ならすぐ取れるぞ」

「なんで？」

「此処に学園都市製、掃除機があるからな」

上条が得意げに呟くが、幻想郷には無いものなので霊夢たちにはよく解らない物えお掲げている変な人状態である。

「で、それは何をする道具なんだ？」

「あゝ、埃を吸い取ってくれる道具だ」

上条は霊夢たちのリアクションの薄さに頂垂れながらも答える。

「それも外にある物なの？」

「ああ、これより性能は悪いと思うがあると思う」

「香霧の所で見たことあるぜ」

「香霧？」

「外から流れ着いた物を買ってるとこよ」

「へゝ、今度行ってみたいな」

その一言を言った瞬間少女たちの眼つきが変わった。表情では解らないが確実に変わった。

三人、声を揃えて同時に言った。

「私を連れて行ってあげるわ」

「そ、そうか。ありがとな……」

少女たちの様子に弱冠引きながらもお礼はちゃんと言う。

少女たちがどうして必死なのか解らないまま、滞っていた掃除を再開する。



少年少女掃除中……

掃除を終えた上条たちは、現在、ポケットから出したお菓子を食べている。

全員やりきった感に満ち溢れていた。

「そついえば当麻。包帯の巻き方を教えてあげる、って前に言ったよね？」

アリスに尋ねられ、そついえばそうだった、と思い出す。

「こつちに来て。教えてあげる」

「ああ、ありがとう」

上条がアリスに近づいていく。

霊夢達はお菓子に夢中で気がつかない。

その間に出来るだけ差をつけようとするアリス。

「もっとこつちに来て」

「わ、解った」

これでもかという程アリスは上条に密着する。  
主に胸を押し当てるように。

「アリスさん。上条さんの腕に柔らかい『モノ』が当たってるのでせうが……」

「ちゃんと教えないといけないでしょ。仕方ないじゃない」

\*

上条は包帯の巻き方を無事？伝授し終え慧音の家にお礼をしようと向かっている。

案の定、慧音が授業をしていた。

それを眺めながら授業に集中している子供たちにめを落とす。

子供はいいな、というお年寄りオーラを出していると慧音に声を掛けられた。

「当麻、昨日言っていて掛け算？というものを教えてやってくれな  
いか？」

「あ」

第十六話 掃除って面倒だね b y 将軍（後書き）

今回はマサトさん提案の上条が一日せんせーになるお話です。

第十七話 当麻先生（前書き）

楸さん、マサトさん感想ありがとうございました。

タイトルが木山先生みたいだ……。

## 第十七話 当麻先生

「まず、掛け算っていうのは、あゝ二つの袋にミカンが四つずつ入っていた時に一瞬で何個か解る便利な計算なんだ」

「……へへ、スゴイ……」

「皆、この表を見てくれ」

そう言つて黒板に貼りだしたのは、誰もが一度はお世話になった事のある九九の表だった。

製作時間わずか五分。

「皆、今からこれを全部覚えてくれ」

「……えへ、無理だよ……」

「大丈夫。今から俺が読むから皆も読んでくれ」

「……ハ……イ……」

流石、慧音と言つべきか。

慧音が上条の指示に従つようと言つただけ全員が指示に従つ。皆、頭突きを恐れているようだった。

\*

「じゃあ、この表を小さくしたのを配るから家でちゃんと覚えて」  
「いよ」

「なあ、当麻」

「ん!？」

「当麻の世界の遊びを何か教えてやってくれないか?最近、子供たちがつるさくてな」

ゲームはダメだ。この世界(幻想郷)の子供たちに悪影響を及ぼしてしまう。

なら球技という事で無難にドッジボールとなった。

「皆、集まれ」。当麻先生が新しい遊びを教えてくれるそうだ」

上条は、当麻先生といわれ何とも言えない気持ちになりながらも子供たちを集める。

少年説明中……

「解ったか。馴れてきたら横投げを加えてもおもしろいぞ」  
「横投げ?」  
「外から投げるときに……」

\*

「じゃあ、やってみよう解らない事があつたら言ってくれ」

「は〜い」

試合が始まる。

所詮は子供だが一生懸命やる姿は見ていて楽しい。

慧音も同じらしく、子供は良いな、と呟いているが、心の中ではどうやって上条と作るうか考えている。

（私は半人半妖だから産めないか？いや、半分は人だから産めるはずだ！！）

考え込んでいる慧音を尻目に時間はどんどん経過していく。

\*

94

「負けた方も次頑張ればいいさ。な！！」

「うん……」

「これやるから元気出せ」

そう言いポケットから一口サイズにきられたチョコレートを負けたチームに渡していく。

「あ！！ずるいぞ！！」

「大丈夫だ。勝った奴にはこれをやるっ」

そう言いポケットから飴を出して渡していく。

「楽しかったか？」

「うん！！」「」

「じゃあ、当麻先生にお礼を言おうな」

「……当麻先生もう来ないの」

子供たちが口ぐちにもらしていく。

「そんな顔で見つめんなよ。また来てやるからさ」

「うん！！ありがとうございました！！」

「じゃあな」

「またねー」

子供たちを見送ると、慧音と少し雑談して家に帰った。



## 第十七話 当麻先生（後書き）

慧音との雑談は書きたかったんですが、書くともたなんか約束して、原作が後回しになるのでやめました。

あと、もしかしたら次で話が一気にとぶかもしれませんがご了承ください。

P・S 一方通行みたいな能力を持ったオリ主が幻想入りする小説を書こうか悩む今日この頃。

第十八話 空って悪い思い出しかないんだけど by上条当麻（前書き）

マサトさん、ハイドラさん感想ありがとうございます。

ハイドラさんにアドバイスを頂いたので、それを意識して書きましたが、間違えているかもしれません。

処女作という言葉を盾に、これからゆっくり文を書くのが上手くなれたらな〜、と思います。

第十八話 空って悪い思い出しかないんだけど by上条当麻

「不幸だ〜」

彼の朝はこの一言から始まる。

「やっぱこれ言わなきゃ起きたって気がしないもん」

……色々と何が末期になつてる発言をしながら、布団から出て体を伸ばす。

順番が逆の様な気がするが、朝起きた瞬間に足を釣るという体験をした上条は不幸から始まるらしい。

「今となつては暴飲暴食ニートシスターの為に早起きしたのもいい思い出だな〜」

そんな事を思いつつ朝食を作る。

ポケットの中には完成した料理などが入っているが、ニートにはなりたくないなので自分で作る。

挨拶回りをした時に、隣のおじいさんがくれた野菜を切りながらお礼の品を考える。

(やっぱここは芋羊羹かな〜)

何かとおいて芋羊羹を推す上条。

昨日のおじいさんにお礼を済まし、人里の入り口で霊夢たちを待つ。香霧堂？ という結界の外の物を扱っている店があるらしいので案内してもらおう約束をしたからだ。ちなみにアリスは用事が出来た、と言って今日は来れないらしい。

（滅茶苦茶行きたそうだったよな）

どこまでも上条は上条だった。

\*

霊夢、魔理沙と合流し現在、始めて空を飛行中の上条。だが、初めてなので感覚が掴めない。

「遅いぜ当麻」

「悪い。やっぱ練習しねえとな」

「私も昔は飛べなかつたから、大丈夫よ」

昔を懐かしみながら霊夢が言う。

そこで上条は疑問に思う。

「じゃあ、どうやって異変解決してたんだ？」

「玄爺の背中に乗せてもらったのよ」

「玄爺？」

「うん、亀の玄爺」

「亀!？」

「今度かしてあげようか？」

「いや、遠慮しておく」

空飛ぶ亀。

想像しただけでシュールな光景が目の前に広がる。

その背中に乗るなどもつてのほかだった。

「じゃあねえな、後ろに乗れよ当麻。ただし筭には触るなよ」

「じゃあどうすりゃあいいんだよ？」

「腰にでも手をまわしてくれ」

上条はおそる、おそる魔理沙の腰にてを回す。

霊夢はやられたと思いつながらその光景を見守るしかできない。

(おお、最近ダイエットして正解だったぜ)「もっと強く掴まないと振り落とされるぞ」

(ああ、俺は鉄の理性をもつ男、上条当麻だ。素数を数えれば大丈夫なはず)

「じゃあ、飛ばすぜ!！」

「ちよっと待ちなさいよ」

(何だこれ!早すぎだろ!言つぞ、言つぞ。せーの)「ふぶぶらららら」

風のせいでいつもの台詞すら言えない上条。

魔理沙は上条に抱きつかれ、ハイテンションになり、最高速で飛ばした。

\*

「死ぬかと思った」

「ここが香霖堂よ」

吐きかけている上条を無視して霊夢が店内へ入っていく。上条も魔理沙もそれに続いた。

第十八話 空って悪い思い出しかないんだけど b y上条当麻（後書き）

ハイドラさんからの質問で全キャラにフラグ立てるんですか？ という質問があつたのですが、幼女には建てません。でも、仲良くはなると思います。萃香は解りません（フラグの建て方も）。

次は霖之助さんにフラグかなwww（嘘）。

阿求と文のフラグを募集中。気軽にアイデアを書き込んでください。

第十九話 香霖堂（前書き）

楸さん、マサトさん感想ありがとうございます。

野村哲也さんスゲエエエエ、とか思う今日この頃。  
知らない間に十九話もいった。



## 第十九話 香霖堂

「いらつしゃ……なんだ君たちか」

「客に向かつて露骨に嫌な顔するなよ香霖」

「ちゃんとお金を払ってくれるんなら歓迎するよ。で、その君は誰だい？」

「上条当麻っていいいます」

「僕は森近霖之助。まあ、好きに読んでくれ」

店内には外の世界の物が並んでいた。

「君は外来人なんだろう？ 魔理沙から聞いたよ。よかったら道具の使い方を教えてくれないかい？」

「ああ、いいですよ」

少年説明中……

上条と霖之助は、物の説明を通して仲良くなっていた。

霊夢と魔理沙は、霖之助が淹れたお茶を啜すすっている。

「それでこの『ケイタイデンワ』とはどうやって使うんだい？」

「それは充電と言って……」

\*

「そつだ！！ お前らにこれ渡しとくよ」

そう言つてポケットから出したのは、補聴器のよりも小さく軽い、耳にちょうど当てはまるものだった。

これは、ジャツジメントや警備員アンチスキルなどが使用していた、無線機だ。無線機なので電波が無くても話せる。更に太陽光発電なので電池切れの心配もない。

学園都市の技術で電波の範囲もかなり広い。

唯一の欠点と言えば、ちいさすぎて無くしてしまう事がある事ぐら이다らう。

「なんだ、コレ？」

「まあ、耳に着けて、そこに居ろ」

そう言つて上条は店の奥へ行く。

すると魔理沙の耳に上条の声が聞こえてきた。

「魔理沙聞こえるか？」

「うわー！！」

いきなり耳元から声が聞こえたら誰だつて驚くだろう。

魔理沙も例にもれず、腰を抜かして倒れてしまった。

霊夢や霖之助には上条の声が聞こえないので、何も無い場所で倒れて何やってんだ？ 状態である。

「魔理沙……何してるのよ、大丈夫？」

「今、当麻の声が聞こえて」

「僕には何も聞こえ無かったよ」

「私にも」

「でも絶対「落ち着け魔理沙」ほら、今だって」

魔理沙が抗議していると奥から上条が出てきた。

魔理沙は上条に説明を求めろ。

「なあ、当麻これなんだよ!？」

「これは離れた人と会話が出るんだ」

「携帯電話と似ているね。何か違うのかな？」

「まあ、似てるんだけど……」

少年説明中……

「解った。ありがたく貰っておくよ。また、お茶でも飲みに来るといい」

「私たちの時とは対応が段違いね」

「彼は道具の使い方を教えてくれるからね」

「ハハハ。じゃあ、また来ますよ」

「また、集りに来るわ、霖之助さん」

「じゃあな香霖」

そう言って上条たちは香霖堂を後にした。

\*

「そういえば、前にキノコ料理を振舞うって約束したよな、当麻！」

「そういえば、そうだな」

「ここから私の家は近いから今から来ないか？」

「じゃあ行くか。霊夢はどうする？」

「私は人里で買う物があるから遠慮しとくわ」

そう言つて人里の方へ飛んで行つた。

上条と魔理沙は年中休みしかない霧雨邸へ行く事になった。

「なあ、昨日、人里を周つてる時に見かけたんだけど霧雨道具店つてお前の実家か？」

「そうだぜ。……どうかしたのか？」

「なんで一人暮らししてんだよ？」

「あゝ、親に勘当さてたんだ」

「仲は直しといた方がいいぜ」

「……当麻には関係ないだろ」

「関係ないけどさ……そういうのはやっぱり仲良い方がいいだろ」

「ほつといてくれよ」

そう叫びながら、魔理沙はどこかへ飛んで行つた。

上条は追いかけるが、既に見失つてしまった。

「取り敢えず探すか」

そう自分に気合を入れて上条は馴れない足取りで空を飛んで行つた。

第十九話 香霖堂（後書き）

あゝ、早く原作に入りたいたいのには蛇足が加わったあああ！！クソオオオオ！！チクシヨオオオオオ！！

しかもキャラ設定とか見てたら書けるきがしなくなってきた……。orz。

これからドンドン、オリキャラ化していくかもしれませんが、よろしくお願いします。

第二十話 親孝行はお早めに by上条当麻(前書き)

ハイドラさん感想、誤字、脱字の指摘をありがとうございました。

誤字がありすぎて嫌んなる……orz。  
今回は超badbadな予感。

## 第二十話 親孝行はお早めに by上条当麻

「たく、どこいきやがったんだよ!！」

現在、上条は、飛んで行った魔理沙を探していた。

どこに行ったか、まるで見当もつかないので、捜しまわっている。

\*

十分ぐらい飛びまわっていると、先ほどまでお世話になっていた香霖堂が見えてきた。

(霖之助さんならどこに行くか解るか?)

そう思い、香霖堂のドアを叩いた。

「やあ、いらっしやい。一時間ぶりだね。そんなに焦ってどうしたんだい?」

上条は事情を説明した。

少年説明中……

「そうかい。そういう時は、大概家に居るものだよ、魔理沙は」  
「そうか。なあ、魔理沙が勘当された理由について何か知らないか？」  
「？」  
「詳しくは知らないけど、魔法に使うアイテムがどう、とか言っていたね。本人に聞いてみるの一番早いんじゃないかい？」  
「そうするよ。魔理沙の家、教えてくれないか？」  
「ここから……」

\*

「ここが魔理沙の家か……」

周りにはガラクタが散乱しており、お世辞でも綺麗と言えるレベルでは無かった。

とりあえず玄関を探しあて、呼び鈴を鳴らすが出て来ない。

「魔理沙、入るぞ」

取り敢えず、このまま佇んでいても埒が明かないので家に入る。鍵は閉まっていらないらしく、すんなりと開いた。

家の中も、お世辞でも綺麗と言えなかった。

本などがそこらに散乱しており、どこにテーブルがあるのかも解らなかつた。



どこからGが出てきても可笑しくない。  
ガラクタの山を越え、階段があったので登ってみると、噁り泣く音が聞こえた。

案の定、魔理沙だった。

「おい、大丈夫か？」

「なんでここに居るんだよ？」

「なんで、って言われてもな」

俗に言う不法侵入をしたのだから、責められても文句は言えない。

「お前が心配だったから」

「……当麻には関係無いだろ」

「あんな、友達なんだから、関係無い訳無いだろう」

「……私を泣かしたのはお前だぞ」

「うっ。でも、親とは仲直りした方がいいって。な！！大体、なんで勘当されたんだよ？」

「私が魔法使いになったから。それで、店にも魔法のアイテムを置いた方が良いつて言ったら、勘当された」

はあ、と溜め息をつきながら魔理沙の横に腰掛ける。

結局、魔理沙の親も、妖怪と戦う魔法使いにさせたくなかった。だから、勘当するぞと言つて脅したのか。

それで、魔理沙は幾ら言つても、認めてくれない、魔法のアイテムを置いてくれないで嫌になって飛びだしたのか。

「親に自分の魔法を見てもらった事はあるか？」

「ない。幾ら言つても認めてくれない」

「じゃあ、今のお前の實力を見せに行こう。うんでもって、自分がしたい事をちゃんと言いに行こう。まずはそれからだ。な！！」

「でも」「まず、話合おう。俺も一緒に行つてやるから。な！」「…  
…うん」「

言葉ではそう言ったものの、魔理沙はまだ乗り気ではなかった。  
上条は魔理沙の手を引つ張り、無理やり立たせ

「思い立ったが何とやらだ！！ 行くぞ」

「ちよつと待てよ！！ 当麻！！」

そのまま人里まで引つ張つて行つた。

第二十話 親孝行はお早めに by上条当麻（後書き）

はい。次回は魔理沙のつつぁんに会いに行きますが、原作にはあるのですが、名前すら出ていないので、オリキャラのようになります。

PS 新約二巻が楽しみでしゃあない。あと、SS集も。

## 第二十一話 霧雨道具店（前書き）

ハイドラさん感想ありがとうございました。

さて、長らくこの小説を放置してしまい、申し訳ありませんでした。必ず完結はさせるのでこれからもよろしくお願いします。

あと、注意書きの方には目を通して頂いたでしょうか？

今更ですが、必ず読んでおいてください。

今回は短いです。非常に。

霧雨の親父さんをどんな人にしようか悩んでいるので、暫く放置するかもしれませんが、解ってください。

## 第二十一話 霧雨道具店

「なあ、本当に行くのか？」

「当たり前だろ？ 今行かなくて、いつ行くんだよ？」

現在、上条と魔理沙は、言わずと知れた人里の御用達、霧雨道具店の前に居る。

ここまで来たのは良いのだが、入る前になって魔理沙が抵抗する。

「取り敢えず、閉店したら入ろう。な？」

「でも「でもじゃねえ」……ううう」

\*

「まあ、お嬢様！！ 帰って来られたのですが！！」

入った瞬間、使用人であろう人に声をかけられた。

魔理沙は気まずそうに目をそらす。

「すみません。コイツのお父さん読んでくれませんか？」

「失礼ですが、あなたは？」

「コイツの友達です。いくら言っても行きそうにないんで、付いてきました」

「そうでございましょうか！！ それは失礼いたしました」

そう謝罪すると、使用人は、いよいよお嬢様も……、と盛大な勘違

いをしながら上条を一室まで連れて行った。

「しばしこちらでお待ちください。旦那様をよんできます」

そう言って使用人は出て行った。

第二十一話 霧雨道具店（後書き）

続きは今週中に必ず投稿するつもりです。

第二十二話 霧雨家（前書き）

ハイドラさん感想ありがとうございます。

今回も超おさおさ。



## 第二十二話 霧雨家

「今更何の用だ、魔理沙？」

「私の話を聞いてくれませんか？」

「幾ら言おうがマジックアイテムなんて置かんぞ」

「その話じゃありません」

魔理沙はいつもの様な男口調ではなくなっていた。

上条はその光景を黙って見守る。

「私をもう一度家族にしてください、お願いします」

涙を交えながらそう言って頭を下げた。

魔理沙の父親は、目を見開いている。

「魔法使いはもうやめるのか？ なら、いつでも帰ってこい！！」

お前の居場所はとってある」

「魔法使いはやめません」

「なぜだ！！ 何で妖怪に喰われにくい様な事をするんだ！？」

「魔法使いという職業が好きだからです。だから、お願いです！！  
認めてください」

魔理沙は、また頭を下げた。

父親の方は認めるつもりはないらしく、腰をあげて出て行こうとした。  
それを上条が引きとめる。

「魔理沙の話を聞いてやれよ！！」

「もう十分聞いたわ！！ こんな話をする為にここへ来たのか！！」

「ああ、そつだよ。魔理沙はあんたに認めてほしくて、もう一度家

族になりたくてここに来たんだ！！ 認めてやれよ、魔法使いって職業を！！」

「わざわざ妖怪に喰われるような職業なんて認められるか！！」

「アンタ一度でも魔理沙の魔法を見た事あるか？ テメエに認められたくて、頑張つて修行した魔法を見た事があるか！！ 認めてやれよ、自分の娘の夢ぐらい認めてやれよ！！」

魔理沙の父親は黙ってしまった。

魔理沙は、まだ頭を下げ続けている。

「魔理沙……、魔法使いになって後悔はしてないか？」

「はい！！」

「本当か！！」

「はい！！」

魔理沙の父親は魔理沙を抱きしめてた。

とても強く、二度と手放さないように。

「認めてやれなくて悪かった。本当に悪かった！！」

「ううん、ありがとう。認めてくれて本当にありがとう！！」

\*

そこからは落ち着いた魔理沙は母親に会いに行った。

現在、部屋には魔理沙の父親と上条だけである。

魔理沙の父親は上条の方に向くと、頭を下げた。

「君のおかげだ、本当にありがとう。このままだと私たちは死ぬまでこのままだったと思う」

「よしてくださいよ。俺はただ背中を押しただけですから」

「魔理沙の事をこれからもよろしく頼むよ（結婚的な意味で）」

「ええ、任せてください（守る的な意味で）」

結構重要なことを履きちがえながら会話は進んでいった。

\*

「じゃあ、俺は帰りますんで」

「ああ、何か困った事があったら言ってくれ、霧雨道具店が全力でサポートするよ。もちろん、有料でな」

「有料かよ!!」

冗談を交えながら家路についた。

## 第二十二話 霧雨家（後書き）

ハイドラさんからの質問で『茨木華扇は登場しますか？』とあったのですが、全員だすつもりです、ハイ。（旧作は微妙）

## 第二十三話 稗田家

「当麻くいるか」

表から慧音の声が聞こえる。

朝早くから訪問だった。

「なんだ慧音？ こんな朝早くから」

「いや、お前が過ごしていた世界の事を聞きたい、という人がいてな、会ってやってくれないか？」

「別にいいけど」

「そうか、ありがとうな。それじゃあ私は授業があるから」

「ちよつと待て！！ 時間も場所も誰に会えばいいのかすら言っ  
てねえぞ！！」

「いや、悪かった、ハハハ。霧雨道具店を知っているか？」

「ああ、昨日行ってきたぜ」

「そうか、前の大通りに茶店があるんだ、そこで昼過ぎぐらいに行けばいいらしい」

「解った。わざわざありがとな」

「いやいや、礼を言うのはコツチだよ。受けてくれてありがとう」

\*

昼過ぎまで、まだまだ時間があるので人里を見て回る事にした。  
朝早くとあって皆急いでいる様子がある。

その慌ただしい様子を見ながら、これからの事を考える。

(旅する予定だけど、どのタイミングで旅のようか?)

自分にその事を問いかけながら散歩していると、アリスに会った。

「よう、久しぶりだな。アリス」

「二日ぶりぐらいだけどね」

「シャンハイ」

「ホウライ」

「お前らも久しぶりだな」

飛びついてきた人形二人？ を肩に乗せながらアリスの横に並び、人里に来た理由を尋ねる。

「どうしたんだ、人里に来て？」

「新しい人形を作るための布を買いにちょっとね。今からお邪魔させてもらってもいい？」

「ああ、昼からは予定があるから、午前中だけなら」

「決まりね」

\*

「ただいま」

部屋に誰もいないと解つていても言ってみる。  
するとアリスがいきなり答えた。

「お帰りなさい。御飯にする？ それともお風呂？ もしかしてわ  
た「はい、そこまで。冗談でそこから先は言わない方が良いでしょう」  
…半分ガチなのに」

後半の呟きは上条には聞こえなかった。  
居間に入った瞬間、上海と蓬菜が暴れだす。

「あ、コラ！！ 上海、蓬菜」

アリスの声を無視して、家の中にある珍しい物を漁っていく。

「いいよ、壊れないだろうし」

「そう？ じゃあ、何も言わないわ。あ！！ あとチョコレート。  
あれくれない？」

「もう無くなったのか！？」

「仕方無いじゃない。美味しいんだもの」

「解ったよ。喰いすぎんなよ」

「ありがとう」

そこで、昼までの暇つぶしを思いつく。

「なあ、アリス。俺に裁縫を教えてくださいませんか？」

「裁縫！？ あなたが！？」

「ああ、教えてくよ。頼む」

そうやって上条は頭を下げた。

アリスは上条に頭を上げるように言つと尋ねる。裁縫をする理由を。

「いや、なんか知んねえけどさ、俺の服よく破けるんだよ。多分  
いつもの不幸だと思うんだけど、な」

そう言つて上条は苦笑いを浮かべる。  
アリスは呆れながらも、裁縫を教えることにした。

\*

「お、もうこんな時間か」

「結構集中してたわね」

「今日は色々とありがとうな、また今度チョコでも持って遊びに行くよ」

「いつでも歓迎するわ」

そう言つてアリスと別れた。

上条は団子屋に向かつて歩き出す。

\*

団子屋について暫く待つと女性に声をかけられた。

まさか、生まれて初めての逆ナン!! と内心馬鹿な事を考えていた上条に、確認の声をかけらる。

「あの、上条当麻さんですか？」

「はい、そうですが……あのどちら様で？」

そう尋ねると女性は、ハッとし、



「申し遅れました。私は稗田家に仕える物です。あなたをお迎えにあがりました」

## 第二十三話 稗田家（後書き）

誰かお願いします。阿求の口調を教えてください。どこを覗いても見当たりません。

この人の口調に似ている、みたいな物でいいのをお願いします。じゃないと次の話が一生書けない……orz。

あと、阿求さんはこんな感じで惚れるのがいいな、みたいなものがあつたら言ってください、明日の九時まで受付ます。

阿求以外でも、思いついたらドンドン書き込んでください。

第二十四話 五人目の被害者（稗田阿求）（前書き）

ハイドラさん感想ありがとうございました。

今回もgdgdです。あと、阿求の口調がとても不安です。違和感を感じた方がいらしたら、感想の方にも書き込んでください。お願いします。

## 第二十四話 五人目の被害者（稗田阿求）

「はじめまして。稗田阿求と申します」

「上条当麻です。あと、これをどうぞ。つまらないものですが」

そう言っつて、予め用意しておいた紙袋を手渡す。

「なんですか、これは？」

「あゝ、外のお菓子つてやつです」

「そうですか、それはありがとうございます」

阿求は使用人を呼び出すと、後でこちらに持ってくるように、と言っつて紙袋を手渡した。

「どうぞ、腰をおかけください」

「あ、ああ、ありがとうございます」

見た目十代前半とは思えない仕草に戸惑いながらも、腰を下ろす。

「私は、この幻想郷に住んでいる妖怪の特徴などを書いております」

「へゝ、そうなんですか。よかつたら、今度見せて頂けませんか？」

「まだ編集が終わってないので、完成したらお知らせしますね。あと、敬語じゃなくてもいいですよ」

「ああ、解った。完成を楽しみに待ってるよ」

まだ幻想郷に住んで一週間もたっていない上条からしたら、少しでも情報が欲しかった。

「それで、本題なんですが……」

「ああ、俺の住んでいた所の話でしたね。俺の住んでいた町は、学園都市と言つて、最先端科学が……」

少年説明中……

「とても興味深い街ですね」

「ええ、住んでて楽しい所ですよ」

上条は、『闇』については話さなかった。

話す必要が無い、と思つたからだ。

「でも、稗田つてさあ、なんか俺より年下のはずなのに、年上な雰囲気持つてるよな？」

「……私が老けている、と言つ事ですか？」

口調も雰囲気も変わっていないのに、目だけは笑っていなかった。

「いやいや、そう言う事じゃなくて、お姉さんのな」

「そうですか。……実は私、転生してるんですよ」

「えっ？」

転生？

この町（幻想郷）はやっぱりとんでもない所だった、と再認識させられながら尋ねる。

「転生つてあれですか？ あの生まれ変わるって奴」

「ええ、それで合ってますよ」

「マジで!？」

「はい。ちなみに、私で九人目です」

だから妙に礼儀力なってるのか、と一人で自己完結し、能力を尋ねる。

転生できるというのなら、それは凄い能力だろう、と勝手に妄想を膨らませながら。

「じゃあ、能力つてあるのか？」

「はい。一度見た物を忘れない程度の能力です」

「……そうか」

急に暗くなつた上条を気にかけて、阿求が尋ねる。

「あの、私なんか気に障ることをいいましたか？」

「いや、そんなんじゃないんだよ」

手を振りながら否定する上条。  
その様子を見て安堵する阿求。

「前の世界でさ、知り合いつていうか、居候がその能力を持っててな」

「そうなんですか」

「それでさ、その居候は完全記憶能力つてのを持ってんのに、家電の使い方を一向の覚えなくてさ。それで、それで……」

インデックスの話語っている途中で涙が出てきた。

阿求が、心配そうに自分を見つめている事に気がつくくと、

「あ、悪い。なんか、色々思い出してさ」  
「好きだったんですか。その方が？」  
「解んねえ。けど、もう一回会いたいかな」  
「そうなんですか？」  
「ああ、謝るって言ったのに、結局会えなくてさ」  
「よければ聞かせてくれませんか？ その人の事を」  
「ああ、いいぜ。逆に聞いてほしいくらいだよ」  
「今日はとことん聞いてあげます」

ここで新しい生活を送るために、過去の自分と別れるために、今までやってきて事を聞いてもらうことにした。

「んじゃ、さっき話さなかった事も全部話すぜ。覚悟しとけよ」  
「はい」

\*

上条の話が全部終わるころには、もう日が暮れていた。

「それで、神様に会って、ここに（幻想郷）に飛ばされたんだ」  
「そうなんですか。それで終わりですか？」  
「ああ、終わりだ。聞いてくれてありがとな、おかげで色々と整理がついたよ」  
「お役にたてたのなら結構です。今度は私の話を聞いてくれますか？」  
「ああ、いいぜ」

そこから阿求は話し始めた。

転生すると、自分の事を知っている人がいなくなることに、幻想郷縁起に関する記憶しかないこと、一生が他の人より短いこと、短い人生の中で、閻魔と転生の交渉をするため自由な時間が無い事などを話した。

「よし、じゃあ、転生が怖くなくなるぐらいの楽しい思い出を作ろう。それで転生したらもつと楽しい思い出を作るんだ。転生する度に楽しい事があるって思えば、怖くねえだろ？」

「……そうですね。でも、転生したら、周りは誰も私を知らなくて「じゃあ、八雲とかを頼れよ。妖怪って人間より寿命長いだろ？」

「でも「今を全力で楽しめ。未来の事なんて考えず、今できる楽しい事をしようぜ。な」

「……はい!!」



第二十四話 五人目の被害者（稗田阿求）（後書き）

阿求は、禁書でいう五和のように、この人カッコイイってなって、自分が優しくされて落ちました。

あと、作者の都合で八月二十一日まで更新できません。帰省ってやつです。ネット環境のrの字も無い所まで行きますので、感想の確認などもできません。ご了承ください。

## 第二十五話 赤い霧（前書き）

マサトさん感想ありがとうございます。

皆さんお久しぶりです。將軍です。

帰省中にお気に入り登録数が五十件を越えてました！！  
こんな駄文を読んで頂ける皆様に感謝です。

## 第二十五話 赤い霧

「以外と美味しいな、これ」

そう言って指差すのは鍋の中の兎。

上条は、阿求と兎鍋を食べている所である。

「そうですよね。皆、中々食べてくれなくて。兎鍋の美味しさを解  
つていただいて、うれしいです」

\*

「んじゃ、もうそろそろ帰るとするか」

腰を上げる上条。

そこで何かを思い出した。

「阿求、写真を撮らせてもらっていいか？」

「さっきの話しにでてきた、風景を一瞬で絵にするっていつのです  
か？」

「ああ。で、撮ってもいいか？」

「はい。いいですよ」

今日起きた出来事も日記にまとめないと、と思いつながらシャッタ  
ーを切る。

「幻想郷縁起、完成したらちゃんと教えてくれよ」

「はい。また、いらしてくださいね」

\*

「はあ、明日は旅の買いに……ポケットの中に入ってるからいいか」

日記をまとめながらそんな事を考えていると、携帯の代わりに使っている無線機が音を発した。

机の上にある無線機を拾い、返事を返す。

「もしもし」

『上条君、明日よかつたら明日、香霖堂へ来てくれないか？』

電話はそれだけを、一方的に伝えると切れてしまった。

「何時の時代の使い方だよ!」

無線機に向かってツツコムが、返事は当然返ってこない。

「もう一度使い方教えねえとな」

\*

目覚ましの音で目が覚めた上条は、窓を開けて絶句した。空が真っ赤な霧に覆われていたのだ。

取り敢えず表に出ると、里の人たちも騒いでいた。

「当麻ー」

「おい、慧音、どうなってるんだこの空は!？」

上条は真っ赤に染まる空を指す。

慧音はウンザリとした様子で答える。

「解らないんだ」

「これが『異変』って奴なのか？」

「多分そうだろう」

「じゃあ霊夢の所に行ってみるよ。アイツ異変解決のプロなんだから？」

「私は寺小屋に里の皆を避難させてくるから、用があったら寺小屋に来てくれ」

「ああ、解ったよ」

そう言って家に戻ると、身支度を整え、霖之助に連絡を入れ、頼りなさげな感じで空へ飛び立った。

## 第二十五話 赤い霧（後書き）

ハイ、始まりました紅魔郷。唐突？ 気にしないでください。

文のフラグは先送りする事にしました。

アイディアを出してくださった方々、本当に申し訳ありません。

上条に関する新聞が出回る 厄病神として避けられる 鬱条さん発  
生 旅に出る。

と、こんなストーリーを思いついたのですが、作者の文才では、こ  
こからフラグにもっていくなんて無理だったので諦めました。

今後も東方不幸説をよろしくお願いします。

第二十六話 不幸の中心、上条さん（前書き）

今回のタイトルは、とある短編集から拝借（という名のパクリ）させて頂きました。

……久しぶりにこんなに長く書いた気がする。

## 第二十六話 不幸の中心、上条さん

「お〜い、霊夢ー」

やっとの思いで博麗神社に着いた上条。しかし、そこには誰も居なかった。

「もう、異変解決に行ったのかよ」

「お〜い、当麻〜」

声のする方向に目をやると、普通の魔法使い霧雨魔理沙が、箒に跨またがりながら飛んできた。

「当麻も異変解決に行くのか？」

「ああ、そのつもりだ。魔理沙もか？」

「もちろんだぜ!!」

「じゃあ、一緒に行こう。人数は多いほうがいいだろ？」

「今までは一人で解決してきたから気が狂うぜ」

「なんでわざわざ一人で解決すんだよ。ま、途中で霊夢に会うかもしれないし、行くか」

上条はそう呟くと、馴れないと言った感じで空へ向かう。

魔理沙に移動速度の遅さに呆れられ、結局、箒の後ろへと収まった。

\*



霧が流れてくる方に行ったらいいんじゃない？ という事で目的地も決まり、箒を進ませていると弾幕が現れた。

「なんだ！？ 罨か！？」

「そんな大層なもんじゃないぜ。ただの妖精の悪戯だ」

明らかに悪戯の域を超えた悪戯を目の当たりにし、幻想殺しがあつてよかつた、と心底安堵しながら進んでいく。

領域の設定を変更し、一発の被弾もしないスター状態で空を駆け抜けた。

\*

弾幕を打ち消したり、かわしたりで進んでいくと、大きな闇が広がっていた。

その闇は数？先も見えない程の大きな闇だった。

危険を感じた上条は、ポケットから懐中電灯を取り出し闇の中へと向ける。が、何故か闇を照らせない。

「どうなってるんだ？」

「誰かの能力かもしれないぜ」

能力なら右手が通用するはず。

魔理沙に言つて、箒を闇に近付けてもらい、右手を突っ込む。案の定右手は反応したが右手の周囲だけ明るくなって、意味がない。箒から降り、闇へと近づくと、中から爆発音が聞こえてきた。

「魔理沙、俺の領域を少し広げるから、離れるなよ」  
「解った」

一気に闇を領域で消してもいいのだが、中に居ると思われる霊夢にまで被害が及ぶかもしれない、と思うと出来なかった。

爆発音のする方へ歩みを進める事五分。

暗闇の所為で先が全く解らないが、音だけを頼りに進んでいく。  
魔理沙は、さり気至上条の手をつなぐ事を忘れずに。

「本当に何も見えないな」

「音も段々近づいてきてるし大丈夫わ!？」

いきなり周りを覆っていた闇がはれ、瞳に光が差す。

眩しいのを必死に堪え、辺りを見回す。

さっきまでの爆発音も消えていた。

まだ目を瞑っている魔理沙を抱え、歩き出す。

「ここではぐれたら会えるか解んないからな。魔理沙、ちょっと我慢しろ」

「え、ちょっと、どうなってるの!？」

普段の男口調も忘れて困惑する魔理沙を無視して走り出す。  
なんとか飛び立つ前に合流出来た。

「当麻!？　なんでここに居るのよ」

お姫様抱っこされている魔理沙を見て一気に機嫌が悪くなる霊夢。  
そんな霊夢の思いに気付かず、そのまま会話を進める。

「いや、俺も手伝おうと思って」

「私一人で十分よ」

「なんでわざわざ一人になりたがるんだよ？」

そう言われて意味を考えてみる。が、思いつかなかった。

「……………」

「意味が無いんならさ、一緒に行こうぜ。な」

上条に諭され、霊夢もパーティーメンバーに加わった。

「あの、もうそろそろ、下ろしてほしいんだけど」／／／

「ああ、悪かった」

下ろされた後も、暫くは顔を俯かせて真っ赤にしていた。

ここまできて、やっとフルボッコにされた少女の存在に気づく。

「おい霊夢」

「何？」

「『アレ』はなんだ」

「何の事？」

目の前のボロ雑巾の様になっている少女を指差す。

「『ソレ』がどうしたの？」

「やりすぎだろー!!」

「弾幕ごっこなんてこんなもんよ」

上条は、弾幕という脅威の文字に着くごっこと言つ文字は、ただの飾りに過ぎない事を知った。

(何が平和的な喧嘩だよ！！ 一方的な暴力じゃねえか！！)

自分の右手に感謝しつつ、この少女をどうするか思案する。

「取り敢えず、一緒に連れてくか」

「……ロリコン？」

「逃げえよ馬鹿野郎！！ ほっといたら妖怪に喰われるかもしれねえだろ？」

そう言つて少女を抱きかかえる上条。

霊夢は呆れたように少女を指差すと、事実を言った。

「その子、妖怪よ」

「え」

言われた時は既に遅し。

右手がリボンに触れていた。

「封印を解いてくれてありがとう。お馬鹿さん」

さっきの少女とは、似ても似つかぬ笑みを浮かべた、成人女性がそこにはいた。

「何やってんのよ、アンタ」

ジド目で霊夢と魔理沙に睨まれるが、上条にはこうとしか言えなかった。

「不幸だ」



第二十六話 不幸の中心、上条さん（後書き）

上条さんを強くしすぎた……orz。

この小説の上条さんの良い所は、顔面を殴らなくてもフラグを建てれることです。

第二十七話 俺の不幸って……by上条当麻（前書き）

ルチアさん、三国同盟さん感想ありがとうございます。

今回は、短い上にいつも以上にggggで、上条がチート化して、いつも以上に駄文になりました。

## 第二十七話 俺の不幸って…… by上条当麻

「まずは封印を解いてくれたあなたから食べてあげる」

そう呟いた瞬間、小さな闇が現れ巨大化しようとするが、

「ハイ、そこで幻想殺し!!」

発動してわずか数秒でアイデンティティを破壊された。

「……」

両者の間を沈黙が過る。

先に動いたのはルーミア。闇に引きずり込むのを諦め、飛びかかってきた。

それを霊夢の二重結界が防ぐ。上条は右手の設定を妖力も打ち消すよう設定しなすと、二重結界を破壊し、そのままルーミアを抑えつけた。

「……あなた、私に何をしたの？」

「ただ右手で触れただけさ。霊夢、封印用のお札持ってないか？」

「あるわよ」

「これで解決だな」

驚くほど呆気なく封印されたルーミアだった。



「で、なんで当麻はソイツを背負ってるの？」

「あんな所に放っておけるわけねえだろ？」

「妖怪なのに？」

「妖怪でも」

そこまで言うなら好きにきなさいと霊夢が折れた。

そこで魔理沙が抗議を上げる。

「私の筈は二人乗りだぜ」

「じゃあ、起こすか」

右手で頬を打とうとして、霊夢に止められる。

「同じ事を繰り返す気？」

「……スミマセン」

上条からルーミアを奪い、容赦なく打つ霊夢。

横からの静止の声にも応じない。

そこで、ウ、ウウウと、唸った後、ルーミアが目を覚ました。

上条が顔を覗き込むと、

「あなたは食べても良い人類？」

いきなり喰われそうになった。

見た眼に惑わされてはいけない、と自分に言い聞かせ、冷静に答える。

「良いか？ 人は食べちゃいけないんだ」  
「どうして？」

全くの正論に返す言葉も見当たらない。

人間が生物を食べる様に、妖怪も人間を喰うのだから。  
取り敢えず、自分は食べちゃいけない、と言いつける上条。

「そーなのかー」

「そうなんだよ。俺を食べると、さっき言ってた不幸が全部お前に  
移るんだ。だから食べるのはやめとけ。な？」

「うん！！」

「当麻……、いっぱい苦労したんだね」

「……俺をそんな哀れみの目で見ないでくれ……」

上条の不幸体験を聞いて、霊夢と魔理沙は涙を流していた。

第二十七話 俺の不幸って……by上条当麻（後書き）

上条さんは、妖力を消せるようになった。

……上条の能力にどうやって制限掛けようか悩んで、更新が遅れました。

申し訳ありません。

二日悩んで良い案が浮かばないので、コレでどうだ！… って方がいらしたら、感想にでも書き込んでください。

お願いします。

## お知らせ

お久しぶりです。 将軍です。

いつもこの『東方不幸説』をよんで頂き、誠にありがとうございました。

本題を言いますと、上条さんを強くしすぎたので改正する事にしました。

今までほったらかしにしてきた、誤字・脱字なども直したり、まあ、色々と改正するので、暫く更新できません。かなり大幅な改正をします。

更に、学業なども忙しくなってきたので、いつ復活するかは解りませんが、復活した時はよろしく願います。

この話は、改正が終わりしだい消去します。

第一話を9・17に改定しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9565u/>

---

東方不幸説

2011年10月8日23時33分発行